

(書評)

【新刊紹介】

遠藤ゆり子 『戦国時代の南奥羽社会——大崎・伊達・最上氏——』

(二〇一六年三月 吉川弘文館)

田中洋平

本書は、淑徳大学人文学部歴史学科の中世史担当教員として、戦国期研究を進めている著者によるはじめての単著である。本書の紹介をかねて、以下にまず章立てを記す。

序章 本書の視角と概要

- 一 本書の研究視角と課題
- 二 本書の概要

第Ⅰ部 南奥羽社会の大名権力

- 第一章 大崎氏の歴史的 성격
- 第二章 大崎氏の権力構造
- 第三章 大崎氏「天文の乱」の一考察

第Ⅱ部 戦国大名間の外交

- 第一章 執事の機能からみた大崎氏
- 第二章 奥羽の戦争と伊達政宗の母
- 第三章 慶長五年の最上氏にみる大名の合力と村町

### 第三部 南奥羽の地域社会

第一章 公権の形成と国郡・探題職―最上・伊達両氏の事例から―

第二章 「塵芥集」用水規定を通してみる戦国大名

第三章 戦国大名蘆名氏の成立と山野境目相論

付論 奥羽仕置の一考察―小林清治『南奥羽仕置と豊臣政権』・

『南奥羽仕置の構造―破城・刀狩・検地―』によせて―

あとがき・初出一覧

本書では、「序章」において、大きく六つの課題が設定されている。

一つ目の課題には、「従来の研究で指摘されていた中近世の大名権力がもつ領域的性格が、どのように形成されたのかについて、戦国大名が平和と和睦を繰り返す戦国社会を動態的にみることで、その過程を追求することがあげられている。個別的な一大名研究の積み上げではなく、近隣の大名諸領国を含む意味での「地域社会」を設定し、その動態的地位を分析するという視点である。こうした視点は、次に掲げられる二点目の課題とも関連する。その第二点目とは、「大名家はどのようにして領国の平和と秩序の維持を達成することができたのか」という問題意識のもとに、「大名同士の間わり、外交やさまざまな意味でのつきあいに基づく働きかけ」を検討することにある。

第三点目の課題として、「戦国大名が守護職・探題職をもつ意義につい

て、戦国大名の公権としての性格は、守護公権とは別に求められるべきであるという立場から、大名同士の外交を考察することをあげている。

課題の四点目は、本書で取り上げられている南奥羽大名諸氏の研究について、現状での研究史を整理したうえで、これら戦国大名の権力構造にかかる研究が他地域に比べて立ち後れている点に鑑み、「奥羽においても戦国大名の家中・一門の分析を進め、権力構造を究明」することの必要性を提示している。加えて、これまでの戦国大名研究の成果によって、大名領国が、大名によって直接支配される領国、支城領国、従属する国衆領国といった、重層的で複合的ないくつもの領国から構成されており、こうした戦国大名領国を「惣『国家』」と定義している先行研究をうけて、有力な戦国大名を中核とする「惣『国家』」が形成されていく過程やその動向実態について、南奥羽を事例に考察することを第五の課題としている。

六点目の課題として、「村落論を踏まえた大名権力の社会的機能の実態解明」を掲げている。村落の視座から大名権力の機能を追求するという視点は、奥羽地域が領主制の発達が遅れた地域であるとの理解のゆえに、十分に深められてこなかった。しかしながら近年、断片的ながらもこの地域における村請の実態が明らかにされつつある。この点からも第六点目の課題が、その有効性をもつと著者は主張する。

こうした課題を提示したうえで、本書での論述は展開されている。ここではそのすべての章について、その要旨を紹介すべきではあるが、紙幅の関係上、自らの興味関心と特に一致する第三部第三章に焦点をあてることで、新刊紹介としての責任を果たすこととしたい。

同章「戦国大名蘆名氏の成立と山野境目相論」では、一五世紀後半に蘆名氏が戦国大名へと転換していくことに伴い、新規の軍役を塔寺（心清水八幡宮）に課すなど、領内で新たな権限を行使するようになっていた点に注目している。すなわち、同氏が従来の「会津地方の守護」から脱却し、戦国大名化する過程について、新規の権限行使がどのように執行されるようになったのかという点から論究する試みである。

この分析にあたって著者は、当該期の町村がかかえる入会相論に蘆名氏やその重臣が如何に関わり、裁定を下していったのかという点を丁寧に論じている。そこから蘆名氏やその重臣が村町間で発生する相論において、大名法廷を開放し、領内の秩序維持に当たっていたこと、また、武力行使を抑止しつつ、応酬の繰り返しではなく蘆名氏への提訴機会をもつことで争いを解決する道を選択していたとの分析結果を得ている。併せて「平和を望む村町が、紛争解決主体としての戦国大名を生み出す原動力であった」と結論し、戦国大名の権力創出の背景に村町の成立と定着があったことを明らかにした。

この論考は、先記にあげた第六点目の課題を意識しつつ、戦国期に表出してくる村の存在と戦国大名権力を有機的に結びつけたものとして評価できるのではないだろうか。著者の評価によれば、近年の自治体史刊行によって、この地域をめぐる村の研究がようやく進展しつつある。そうした状況下において、最新の研究成果やその動向を十分に消化してうえで行論を展開しており、この地域を研究対象とする後学者にとっても必読の書と言えるだろう。また、中近世移行期研究の成果として、近世的な村がどのように生み出されてくるのか、という点を明示している点

は、中世史研究だけではなく、近世史研究の立場からも示唆に富む分析である。例言するならば、本書からの示唆をうけて、筆者と同様の視点から、近世大名や旗本と村との関係性を再度問う論者が期待されるのではないだろうか。

以上、筆者の理解不足のゆえ、十分に意を尽くすことのできない新刊紹介となってしまったことについて、御寛恕いただければ幸いである。また、日々の忙しい職務のなか、本書を執筆された著者に敬意を表するとともに、二〇一六年一月に発刊された『伊達氏と戦国争乱』（遠藤ゆり子編 吉川弘文館）と併せて一読を薦めたい。

平成二十八年十月十五日受付 平成二十八年十一月二十三日受理

たなか ようへい…淑徳大学 人文学部 助教